



イチ押し

LCC・中堅もキャラ塗装
アニメや漫画キャラクター
にSF作品やゲームの世界
観……。大手だけでなく格
安航空会社（LCC）や中
堅の地方航空までもが派手
な機体で話題をつく
っている。

4



10月12日(水曜日)
月/水/金 発行



すずき・ひらく 1978年生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒。東京芸術大院修了。「描く」という行為を主題に平面、映像、彫刻など多岐にわたる制作を展開。海外でも個展やグループ展などで多数活躍している。主な作品収蔵先は金沢21世紀美術館（金沢市）や英国のロンドン芸術大学など。

幼い頃から道端で何かをみつけては、拾った。土器のかけらや化石、鉱物などを手に取るたび、どこから来たのか、どうしてここにあるのかを想像して楽しんでいた。

大都会の東京にも「何千年も前のかけらや、自然の息吹があちこちにある」と話す。最新のファッショビルなら、コンクリートの壁などに何億年も前の石が混ざっているかもしれない。アスファルト舗装の下には、山からの湧き水がこんこんと流れているに違いない。

人工と自然、デジタルとアナログ。その境界線は実に曖昧で、身の回りのあらゆるもののがつながっているとみる。「宇宙に広がる星座のように自分なりの解釈でつなげたい」。だから無数の点を線でつなぐという、独特的のドローイングで表現している。

仏ファッショングラン
ド、アニエスベーの路面店

森羅万象のつながり描く

点と線のドローイング

「ルー・デュ・ジュール」（東京・銀座）では、1階から3階へと続く階段に壁画を描いた。人が階段を上り下りする動作には、リズムが伴う。そのリズムに呼応するような絵を描こうと考えた。

来店客はいわば宝探しをしに来ている。自分に合う良い品はないかとワクワクする気持ち。お気に入りのアイテムに出会った時のワッと華やぐ、うれしい気持ち。そんな心の動きにも合わせたドローイングを目指した。

「自分の作品を残すことは、それが美術館でも商業施設でも変わらない」という。その場所をつぶさに探求し、差し込む光や人の動きや気持ちに呼応する。

いずれ自分の作品は消え、また別の人があこに作品を残すだろう。「全てはつながり、僕たちは常に曖昧な領域で生きている」

西武渋谷店（東京・渋谷）では展覧会「鈴木ヒラク—Constellations—」が17日まで開催中だ。「漆黒」をテーマに闇と光を表現したドローイングは、全館のビジュアルイメージにもなっている。

（ライター 黒野智子）

